

新型コロナウイルス感染症による長期休校中の  
小学校児童の不安についての一考察  
—SCAS（スペンス児童用不安尺度）による調査結果から—

国藤ゆかり<sup>1)</sup>・中村雅子<sup>2)</sup>

福山平成大学

- 1) スポーツ健康科学研究科（大学院生）
- 2) 福祉健康学部 健康スポーツ科学科

E-mail : y.k9210515@outlook.jp

**【要旨】**

2019年12月に中国湖北省武漢市で原因不明肺炎の初の患者が確認されたと報道されて以来、新型コロナウイルス感染症は世界的に拡大し、混乱と感染への恐怖を感じるなか、子どもたちは突然の長期の休校を余儀なくされた。

そこで、A小学校児童の新型コロナウイルス感染症による休校中の不安の実態を、SCAS（スペンス児童用不安尺度）によって調査し、学年2群別、男女別について分析したところ、不安の大きさや特徴は学年や性によって違いがみられた。このことから今後学校において、子どもたちに正しい知識を伝えるとともに、発達段階や性差に即した心の健康教育の指導内容が必要であると考えられた。

KEY WORDS : 小学生、新型コロナウイルス感染症、不安

## 1. はじめに

2019年12月に中国湖北省武漢市で原因不明肺炎の初の患者が確認されたと報道されて以来、新型コロナウイルス感染症は世界的に拡大した<sup>1)</sup>。それに伴い、日本では2月28日に「緊急事態宣言」を発表するに至り、何よりも子どもたちの健康・安全を第一に考え、多くの子どもたちや教職員が、日常的に長時間集まることによる感染リスクに予め備える観点から、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校における全国一斉の臨時休校を要請する方針が内閣総理大臣より示された(2月27日)<sup>2)</sup>。その後政府の緊急事態宣言(4月7日)が行われる等で、大部分の学校で5月末まで臨時休校が延長になり、トータルで約3か月の休校となった(表1)。

表1 わが国の新型コロナウイルス感染症にかかわる休校措置の経緯(2020年2月~2020年6月)

2/27	内閣総理大臣、一斉休校要請
2/28	文科省、各学校に一斉休校(3/2~春休み)の通達
3/11	WHO「パンデミック」宣言
4/7	内閣総理大臣、1都6県を対象とする緊急事態宣言を発令
4/16	内閣総理大臣、緊急事態宣言の対象地域を全国に拡大 → 全国で5/31まで休校を延長する動き
4/28	文科省「9月入学、確かにメリットある」と発言 → 政府で具体的な検討作業が始まる
5/14	内閣総理大臣、39県で緊急事態宣言を解除
5/21	京都・大阪・兵庫で緊急事態宣言を解除
5/25	緊急事態宣言を全面解除
6/1	ほぼすべての学校で登校を再開

今回の新型コロナウイルス感染症による世界全体の混乱で感染への恐怖を感じるなか、子どもたちは突然の長期の休校を余儀なくされた。学校に通うという日常が奪われたうえに、外出の制限、友だちと会えない状況、生活習慣の乱れ、一人で取り組む学習課題など、通常的环境と異なる要因がいくつも重なっており、子どもたちにとって、身体的・精神的に危機的状況といえた。そのような状況の中で、様々な不安や恐れを抱えている子どもが多く存在した。

文部科学省は、新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン及び新型コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の「学びの保障」総合対策パッケージのなかで、学校再開後における児童生徒等の心身の状況の把握、心のケア等に関しては、「学級担任や養護教諭等を中心としたきめ細かな健康観察や

ストレスチェック等により、児童生徒等の状況を的確に把握し、健康相談等の実施やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等による心理面・福祉面からの支援など、管理職のリーダーシップのもと、関係教職員がチームとして組織的に対応すること」と通知している<sup>3)</sup>。よって、学校再開後の子どもたちの不安をはじめとする心のケアは重要であり、今後の教育活動において不可欠な課題ととらえる。

以上のことから、新型コロナウイルス感染症による休校中でのA小学校児童の不安について、学年及び性別の違いによってどのような差がみられるかを、SCAS(スペンス児童用不安尺度)の結果から実証的に明らかにし、今後の学校での指導に生かすこととした。

## 2. 研究方法

### (1) SCASについて

SCASはGriffith UniversityのSusan H.Spence教授によって開発されたSpence Children's Anxiety Scaleの略称で、世界中で広く使われている子どもの不安症を測定するための自己記入式の質問紙である。

石川(2015)<sup>4)</sup>によると、SCASは優れた精神測定学的特徴を有するため、不安症のスクリーニングや支援の効果測定に用いることができる尺度で、日本語版SCASとして、日本の小学生3年生から中学生3年生にこの尺度が使用できることが確認されたと報告している。SCASの項目及び得点可能範囲は、分離不安障害(0~18点)、社交不安障害(0~18点)、強迫性障害(0~18点)、パニック発作と広場恐怖(0~27点)、外傷恐怖(0~15点)、全般性不安障害(0~18点)、SCAS合計点(0~114点)である。全て得点が高い程、不安が高いことを表している。日本におけるスペンス児童用不安尺度(SCAS)の得点基準となるものは、表2の通りである。

表2 日本におけるスペンス児童用不安尺度（SCAS）の得点基準

		小学生	
		平均	標準偏差
SCAS合計点	男子	19.06	16.47
	女子	27.89	19.82
	合計	23.5	18.75
分離不安障害	男子	2.82	3.16
	女子	4.66	4.12
	合計	3.74	3.78
社交不安障害	男子	3.07	3.14
	女子	5.36	4.27
	合計	4.22	3.92
強迫性障害	男子	4.17	3.45
	女子	4.73	3.5
	合計	4.45	3.48
パニック発作と広場恐怖	男子	2.61	3.96
	女子	4.07	4.95
	合計	3.34	4.54
外傷恐怖	男子	2.93	2.93
	女子	4.39	3.21
	合計	3.66	3.16
全般性不安障害	男子	3.47	3.54
	女子	4.69	3.9
	合計	4.08	3.77

### (2) 調査対象

A小学校の小学3～6年生の男子197人、女子187人、合計385人である。学年2群は、中学年（3・4年）180人、高学年（5・6年）205人とした（表3）。

回収率は98.2%（378/385）であった。

表3 アンケート調査人数

	男子（人）	女子（人）	総計（人）	2群別（人）
3年	50	44	94	180
4年	42	44	86	
5年	48	41	89	
6年	58	58	116	205
総計	198	187	385	385

### (3) 調査時期

2020年5月25～29日の学校再開前の分散登校中とした。

### (4) 統計処理

統計ソフトは、College Analysisを使用した。学年2群別比較・男女別比較について、ウィルコクソンの順位和検定を行った。その際、有意確率を $p < 0.05^*$ 、 $p <$

$0.01^{**}$ 、 $p < 0.001^{***}$ とした。

### (5) 倫理的配慮

アンケート調査内容については、学校長の許可を得て行った。実施する際には、教室内で担任教諭が児童にわかりやすく説明し、記入内容が周囲の児童に見えないよう机の向きや間隔に留意した。結果については、学術研究や教職員による児童、保護者への指導以外には使用せず、その場合には個人が特定されることがないように配慮することとした。

## 3. 結果

### (1) 結果の概要

A小学校児童の全体の平均得点結果を、日本におけるスペンス児童用不安尺度（SCAS）の平均得点基準と比較したところ、合計点は、基準より2.17点高かった。またその他の項目については、分離不安障害（基準+0.55）、社交不安障害（基準+0.25）、強迫性障害（基準+0.29）、パニック発作と広場恐怖（基準+0.34）、外傷恐怖（基準+0.84）、全般性不安障害（基準-0.09）であり、全般性不安障害以外は全て基準よりも高い結果となった（表4）。

表4 A小学校児童の得点結果と日本におけるスペンス児童用不安尺度（SCAS）の得点基準

	A小学校児童の得点結果 (小学3～6年生380名)		日本におけるスペンス児童用 不安尺度（SCAS）の得点基準	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
SCAS合計点	25.67	18.91	23.5	18.75
分離不安障害	4.29	4.06	3.74	3.78
社交不安障害	4.47	3.83	4.22	3.92
強迫性障害	4.74	3.77	4.45	3.48
パニック発作と広場恐怖	3.68	4.45	3.34	4.54
外傷恐怖	4.5	3.42	3.66	3.16
全般性不安障害	3.99	3.68	4.08	3.77

### (2) 学年2群別比較

合計の平均値は中学年27.56、高学年24.02で、分離不安障害の平均値は中学年5.13、高学年3.56（図1）、社交不安障害の平均値は中学年4.58、高学年4.38、強迫性障害の平均値は中学年4.92、高学年4.60、パニック発作と広場恐怖の平均値は中学年3.14、高学年3.29、外傷恐怖の平均値は中学年4.50、高学年4.49、全般性不安障害の平均値は中学年4.30、高学年3.71であり、パニック発作と広場恐怖以外は、中学年の方が不安が高い結果となった。

学年2群でウィルコクソンの順位和検定を行った結果、分離不安障害について2群間に差があるといえた（ $p$

<0.01)。その他の項目については、2群間に差があるとはいえなかった（表5）。

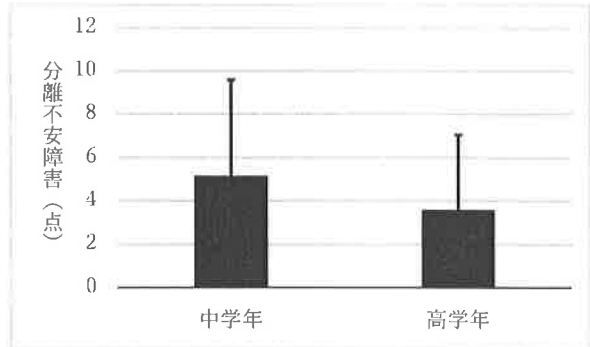


図1 分離不安障害

ニック発作と広場恐怖と、全般性不安障害については、2群間に差があるとはいえなかった（表6）。

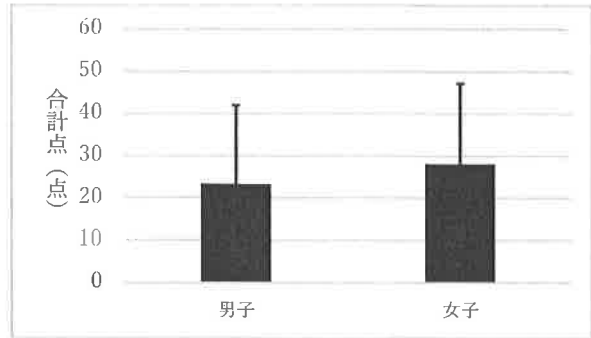


図2 合計点

表5 学年2群別の検定結果

調査項目	学年群	n	平均	標準偏差	p値
合計	中学年	196	27.56	20.94	0.195
	高学年	184	24.02	16.82	
分離不安障害	中学年	196	5.13	4.47	0.001
	高学年	184	3.56	3.50	
社交不安障害	中学年	196	4.58	4.07	0.93
	高学年	184	4.38	3.62	
強迫性障害	中学年	196	4.92	4.01	0.7
	高学年	184	4.60	3.56	
パニック発作と 広場恐怖	中学年	196	3.14	5.07	0.215
	高学年	184	3.29	3.79	
外傷恐怖	中学年	196	4.50	3.52	0.951
	高学年	184	4.49	3.34	
全般性不安障害	中学年	196	4.30	3.83	0.156
	高学年	184	3.71	3.52	

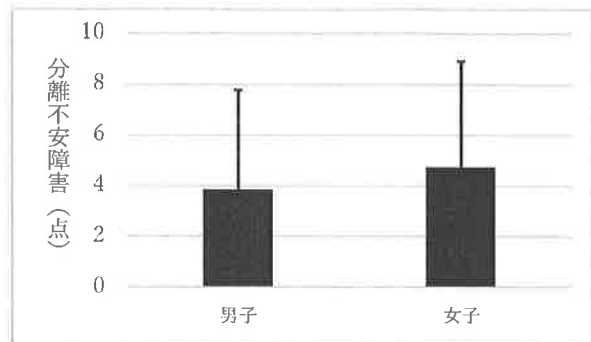


図3 分離不安障害

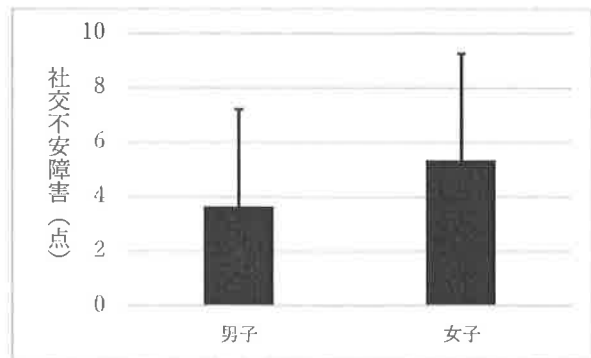


図4 社交不安障害

### (3) 男女別比較

合計の平均値は男子23.34、女子28.16（図2）、分離不安障害の平均値は男子3.86、女子4.75（図3）、社交不安障害の平均値は男子3.64、女子5.35（図4）、強迫性障害の平均値は男子4.46、女子5.05（図5）、パニック発作と広場恐怖の平均値は男子3.47、女子3.91、外傷恐怖の平均値は男子4.13、女子4.89（図6）、全般性不安障害の平均値は男子3.77、女子4.22であり、全ての項目で女子の方が不安が高い結果となった。

男女別でウイルコクソンの順位と検定を行った結果、合計（ $p < 0.01$ ）、分離不安障害（ $p < 0.05$ ）、社交不安障害（ $p < 0.001$ ）、強迫性障害（ $p < 0.05$ ）、外傷恐怖（ $p < 0.01$ ）について、2群間に差があるといえた。パ

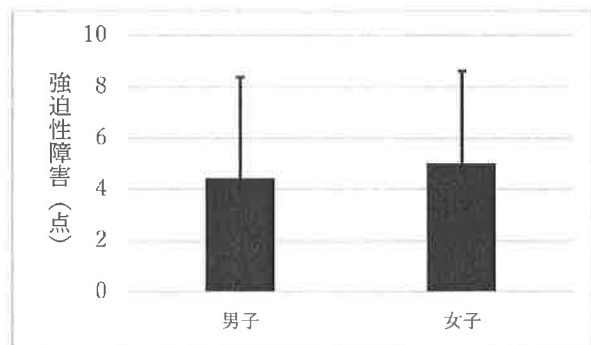


図5 強迫性障害

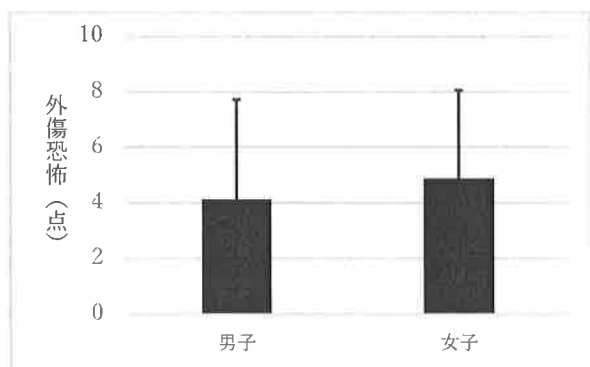


図6 外傷恐怖

表6 男女別の検定結果

調査項目	性別	n	平均	標準偏差	p値
合計	男子	196	23.34	18.60	0.004
	女子	184	28.16	18.97	
分離不安障害	男子	196	3.86	3.91	0.021
	女子	184	4.75	4.17	
社交不安障害	男子	196	3.64	3.57	0
	女子	184	5.35	3.91	
強迫性障害	男子	196	4.46	3.94	0.026
	女子	184	5.05	3.58	
パニック発作と 広場恐怖	男子	196	3.47	4.39	0.098
	女子	184	3.91	4.51	
外傷恐怖	男子	196	4.13	3.60	0.008
	女子	184	4.89	3.18	
全般性不安障害	男子	196	3.77	3.76	0.082
	女子	184	4.22	3.58	

#### 4. 考察

##### (1) 全体結果において

A小学校児童の全体の平均得点結果は、日本におけるスペンス児童用不安尺度（SCAS）の平均得点基準と比較して、高い傾向にあった。コロナ禍においてA小学校児童は、平常時より過剰な不安にさらされていたと考えられた。

##### (2) 発達段階において

学年2群でそれぞれの項目の平均点を比較したところ、「パニック発作と広場恐怖」の1項目以外は全て中学年の方が不安が高かった。柿ら（2008）<sup>5)</sup>による小学生の学校ライフサイクルに関する臨床心理学的研究によると、中学年（3・4年）は「移行期・さなぎの時期」、高学年（5・6年）は「青年へと変化していく時期・前思春期」であり、4年生後半あたりから心理面においても大

きく変化する節目にあたりと述べていることから、心理的発達の移行期である中学年は、大きく変化していく高学年に比べ、未成熟であり、不安が大きかったと考えられた。

そのなかでも「分離不安障害」について、2群間に差があるといえた（ $p < 0.01$ ）。「分離不安障害」のSCASの因子分析は、「家で一人でいるとこわい」「両親から離れると不安」「家族のだれかに、何かひどいことが起きないか心配」「一人で寝るのがこわい」「緊張したり怖くなったりするので学校に行きたくない」「一晩家から離れるのがこわい」の6因子で、親や家族から離れる不安、家族以外の人に対する不安であると考えられる。柿ら（2008）<sup>5)</sup>の心理的特徴のカテゴリ化によると、3年生で「他者の存在を意識し始める」とし、4年生後半で「脱自己中心性（大人への階段）」となると報告していることから、中学年は他者への存在を意識し始め、自己中心性から少しずつ抜け出し、家族からの自立を始める移行期であり、その後の高学年では、自己の自覚とともに自立が進んでいき、分離不安は徐々に小さくなっていくと言える。

また岩崎（2021）<sup>6)</sup>は、新型コロナウイルス感染症について児童に行ったアンケート調査結果から、「児童は、マスクの着用や手洗いなど感染症予防対策はしているが、感染症にかかったらどうなるのか不安を抱いていた。心配な割合は低学年の方が高く、学年が上がるにつれて低かった。」と報告している。

以上のことから、中学年は高学年に比べ、家族と離れる不安をはじめ、家族の感染に対する不安や、対人接触で生じる伝染への不安などが大きかったと予想され、発達段階に応じた不安を軽減させる指導内容が必要とされる。

##### (3) 男女別において

男女別でそれぞれの項目の平均点を比較したところ、「合計点」「分離不安障害」「社交不安障害」「強迫性障害」「パニック発作と広場恐怖」「外傷恐怖」「全般性不安障害」の7項目全て女子の方が不安が高く、7項目中5項目の「合計点」「分離不安障害」「社交不安障害」「強迫性障害」「外傷恐怖」について、2群間に差があると言えた。

そのなかでも特に、「社交不安障害（社会恐怖）」の項目が最も有意差が大きかった（ $p < 0.001$ ）。「社交不安障害」のSCASの因子分析は、「クラスの前で、話をするのが怖い」「他の人が私のことをどう思ってい

るのか不安です」など、対人場面、社会的状況、他者から評価されることに対する不安に関する項目である。二次性徴で出現する自我の目覚めによって、劣等感や孤独感、不安感や様々な悩みを持つようになるが、それらの心理的变化による不安の大きさが、「社交不安障害」の得点に表れたと考えられる。一般的に、女子の方が身体発達や性的発達が早い。大野（1997）<sup>7)</sup>は、女子の方が早く自我発達水準が上昇し始めると報告しており、小学生の3年生から6年生においては、女子の方が必然的に不安が高く、特に二次性徴から起きる心理的变化の現われが女子の方が早いため、社会恐怖的な不安が高くなっているのではないかと考えられる。

以上のことから小学生の3年生以上においては、成長発達に関わる性差を考慮に入れた不安軽減の指導や対応が重要であることが言える。

## 5. まとめ

中学年は高学年に比べ、家族と離れる不安をはじめ、家族の感染に対する不安や、対人接触で生じる伝染への不安などが大きかった。また、女子は男子に比べ不安が高く、特に二次性徴から起きる心理的变化の現われが女子の方が早いため、社会恐怖的な不安が高くなっていた。このことから今後学校での指導において、子どもたちに正しい知識を伝えるとともに、発達段階や性差に即した心の健康教育の指導内容が必要であると考えられる。

## 引用参考文献

- 1) Zhang: china CDCWeekly, Vol.41.2. pp.145-151, 2020
- 2) 文部科学省事務次官藤原誠：新型コロナウイルス感染症対策のための小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における一斉休業について（通知）元文科初第1585号，2020.2.28
- 3) 文部科学事務次官藤原誠：新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン及び新型コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の「学びの保障」総合対策パッケージについて（通知）2文科初第382号 2020.6.5
- 4) 日本語版SCAS Spence Children's Anxiety Scale  
スペインス児童用不安尺度 使用手引，原著者 Susan H.Spence，日本語版構成者 石川 信一：三京房 2015
- 5) 柿慶子他：小学生のライフサイクルに関する臨床心理学的研究，学校教育学研究，2008，第20巻，pp.9-17
- 6) 岩崎和子：新型コロナウイルス感染症から問い直すこれからの学校教育と健康相談のあり方—児童に行ったアンケート調査の結果からみえたこれからの学校教育と健康相談—，群馬県前橋市立東小学校，日本健康相談活動学会誌 Vol.16 No.1 2021
- 7) 大野和男：子どもは自分の成長をどのように感じているのか：Loevingerの自我発達段階と成長感との関係，心理学研究，68，95-102 1997

One discussion about the anxiety of the Elementary School child during  
the long-term closure of a school due to COVID-19  
-From findings due to SCAS (manifest anxiety scale for Spence children)-

Yukari KUNITOU<sup>1)</sup>, Masako NAKAMURA<sup>2)</sup>

Fukuyama Heisei University

1) Department of Health and Sports Science,  
Faculty of Welfare and Health Science (Graduate student)

2) Department of Health and Sports Science

Abstract

Since it was reported that the first patients with unidentified pneumonia were confirmed in Chinese Hubei Wuhan City in December, 2019, COVID-19 spreads worldwide, Children were forced to the closure of a school for the sudden long term while they felt confusion and a fear to infection.

There, The actual situation of the closed anxiety due to COVID-19 of the A Elementary School child, We investigate it by SCAS (manifest anxiety scale for Spence children), After arriving according to a grade 2 grouping, men and women, and analyzing it, as for the size and characteristics of anxiety, a difference was found by a school year and the nature. Therefore, in future in a school, We convey right knowledge and, Instruction contents of the mental health education in line with stages of development and sex differences were thought to be necessary.

KEY WORDS : Elementary School child, COVID-19, Anxiety

## 小学生のレジリエンスを育む振り返りワークの進め方 — A小学校6年生に行った5日間のセルフチェックの結果から 低位レジリエンス群に焦点をあてての検討—

近藤 千穂<sup>1)</sup>・中村 雅子<sup>2)</sup>

1) 福山平成大学大学院スポーツ健康科学研究科

2) 福山平成大学 福祉健康学部 健康スポーツ科学科

E-mail : chiho.kondo@gmail.com

### 【要旨】

本研究においては、小学校6年生に対してレジリエンスを育むため、レジリエンスの要因とされるスキルを習得する振り返りワーク（セルフチェック）を5日間実施し、すべての子ども達に効果的な振り返りワーク（セルフチェック）になるよう、低位レジリエンス群の結果を元に特徴的な行動を明らかにして検討した。ワーク項目は『コミュニケーションスキルの利用』『感情調整』『一日の中で良かった事を見つける』の3つとした。小学校6年生のレジリエンスの現状の把握には、小塩ら（2002）が作成した精神的回復力尺度（21項目）を用い事前に調査した。

低位レジリエンス群は『コミュニケーションスキルの利用』『一日の中で良かった事を見つける』の2項目が中高位群に比べて有意に低い結果となり、感情調整場面でも困難を感じる割合が高い事、良かった事を見つける場面でも避けてしまう傾向がある事がわかった。

以上の事から、一日で行う項目を絞り、振り返りを丁寧に進め、成功体験を積み上げられるようにする事、励ましやアドバイス等フィードバックが必要である事、自分で目標を決めたり選ばせたりする事が、取り残すことなくすべての子ども達のレジリエンスを高める効果的な振り返りワークになる事を考察した。

KEY WORDS : レジリエンス、子ども、スキル